

第十二話 亀岡神社 **がく** **うち** の **ゆ** **らい**  
**樂** **打** の **由** **来** (昭和30年4月25日掲載)



そもそも亀岡八幡神社の樂打の由来を尋ねて見まするに、神武天皇より数えて五十六代目の清和天皇の頃から、源氏平氏と云う武士が興起し、藤原氏の招請により平安の都を守護し奉りました。

然るに「両雄並び立たず」の例えの通り

に、源平互いに相争いましたが、保元平治の乱によりて、平氏の勢いが段々盛んになり、遂には全国の三分の二の所領を一族で占拠し、その権勢を誇りましたが、おごる平氏は久しからずして、元暦の御代に至り、源家の曹子頼朝の興起により、宇治の戦いに破れ、遂には一族郎党都落ちをして、摂津の一ノ谷に城郭を築き、八十二代安徳帝を守護し奉りました。

蒲冠者範朝(かばのかんじゃのりより)は生田の棚を攻略し、九郎判官義経は一ノ谷を攻め、無官の大夫敦盛が熊谷次郎直実に打たれ、薩摩守忠度が武蔵の国岡部の六弥忠澄に打たれたのは、この時であります。

平宗盛は叶わずして、数万の軍勢を引きいて、四国屋島に落ちて行き、ここで那須の与一が扇の的を射落として名声を拍し、平智盛を始めて平家の一類は赤間が関に至り、二位の尼神霊を持ち、宝剣を帯し、先帝を守護し奉り、海底に沈んだのであります。

宗盛知盛親子、教盛経盛教大等殆どが海に入りて空しくなり、三位忠持や重衡、時忠、建礼門院は生捕えられて、鎌倉に送られましたが、どこをどう迷って逃れたのでしょうか平行盛等数十の軍勢とろうの御方など僅かな女官は築後の国柳河に住みついたのであります。

方々から落人が集まるに及んで鎌倉殿の知る所となり、たちまち攻めたてられ、遂には築後の高良山に拠り籠もりました。守勢は弱いのですが山が要塞堅固な為、攻めあぐね、とうとう義仲の故事にならい数百の猛牛を狩り集め山中に迎え、深更(よふけ)に及んでその角に明松を焼して陣屋に放ちましたので平家の人々は山を逃れて、筑後川の河原に逃れ来たのであります。

ここで屈強な武士たちと、忽(たちま)ち合戦となりましたが、どうして鎌倉武士にかないま

しょうか、さんざん切りまくられ、射たてられ、遂には三艘の船に乗り、川の沖に漕いで出ました。そして持っていた槍、刀を流し、着ていた鎧を沈め、赤旗を焼き舟を清めました。川岸の武士たちも一心に見つめています。敵味方の別なく誰一人として声を立てるようなものもありません。二三うらみの言葉を大音声に述べ割腹するものもありましたが、大部分は白装束に身を堅めて合掌しています。やがて嗚咽(おえつ)する女官たちも、今は決心のほぞを堅めたのでしょう。かくて用意の石をたもとに入れ次々と覚悟の入水をしたのであります。

不思議な事には、源氏の必死の捜査にもかかわらず、そう深くもないのに、探す人が死体となって浮かぶ有様で、遂にその屍体(したい)は発見出来なかったそうです。戦国のならわしとは云い乍ら条理のない攻め方をしたものですから村人は気味が悪くて仕方が有りません。

それに戦いの跡の寂しさも手伝っているいろいろの噂が飛びました。たそがれ頃より夜な夜な魂泊(魄?)があらわれ、その亡魂は河伯の水神となり、河童と化して、音楽を奏して舞楽を舞うと言うのです。箏七力笛鼓の楽器を囃し立て、美女と覚して河童が五六人腰を艶しく振り乍ら踊る姿は幽界の鬼気迫ると言うよりは、戦国乱世を超越した、和光の遊戯です。これは柳河御所とまで謳われた、平家の残党のみやびやかな住居と生活をまのあたりに見た。この地方の心ある人々が筑後川の畔に来て過ぎし昔を偲ぶ時に眼前に彷彿として見たというのが根拠のようですが、そこで舞楽に委しいある柳河の佳人が早速、民衆の国家(家)安全五穀豊穰を祈願して、柳河祭典にこの樂打ちを始めたのが縁起があるが、亀岡八幡神社に伝わったのは元文二年七月四日の御神事に始まると云う。(完)